

グループウェア+リアルタイムコミュニケーションをSaaSで提供 クラウド型コラボの衝撃

グループウェアにリアルタイムコミュニケーション機能が加わり、クラウド型コラボレーションツールとして提供され始めた。そのインパクトをレポートする。

文 小林秀雄 (フリーランスライター)

文書に蓄積された知識の探索から現在進行形でコミュニケーションしディスカッションすることへ。そして、組織の壁を越えた情報の共有へとグループウェアの使い方が大きく変わり始めた。

グループウェアに変化をもたらしたものは、第1にリアルタイムコミュニケーション機能とソーシャルネットワーク機能の搭載であり、第2にクラウド

サービスとしての提供である。第1と第2の変化を備えているものをクラウド型コラボレーションツールと呼ぶことにする。

クラウド型コラボレーションツールは2009年から続々と登場している。マイクロソフトは2009年4月にSharePointおよびExchangeなど同社のグループウェア/コラボレーション製品を「Microsoft Online Services (MOS)

の名称でクラウドサービスとして提供開始した。現在、MOSは4つのサービスからなるが、それらをセット提供する「Business Productivity Online Suite (BPOS)」はMOSの中核という位置づけ。

また、グループウェア市場で大きなシェアをもつLotus製品を保有するIBMも2009年10月にパブリッククラウドとして「LotusLive」ファミリーを提供している。日本発のグループウェアを展開するサイボウズは「サイボウズLive」の名称でクラウド型コラボレーションツールの提供を試験的にスタートさせている。同社は2010年夏にも一般公開して事業化する考えだ。高いシェアを持つグループウェアがいずれもクラウド型コラボレーションツールへと変貌しているのである。そして、セールスフォース・ドットコムが、ソーシャルネットワーク機能を取り込んだクラウド型コラボレーションツールとして「Salesforce Chatter」を2010年6月にリリースするなど、その波は他のアプリケーションベンダーにも及んでいる。

既存のグループウェアと新たに登場したコラボレーションツールの違いは何か。IT分野の調査会社、アイ・ティ・アール(ITR)のシニア・アナリストである館野真人氏はこう指摘する。

「従来のグループウェアはコラボレ



マイクロソフトの「Microsoft Online Services (MOS)」の画面。左上はWeb会議の「Office Live Meeting」、右上はIMとプレゼンスにより、テキストベースのリアルタイムコミュニケーションが可能な「Office Communications Online」のクライアント、右下はExchangeのオンライン版である「Exchange Online」のクライアントの画面。これらに「SharePoint Online」を加えた4サービスをセット提供するBPOSの月額利用料は1ユーザー当たり1044円～

